前田慶次郎異聞後編

泊瀬光延

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前田慶次郎異聞後編

【Ｎコード】

Ｎ３１１６Ｆ

【作者名】

泊瀬光延

【あらすじ】

拙著「前田慶次郎異聞」（文芸社刊。絶版なので図書館でお読み下さい）の後編です。前編の概略は「小説家になろう」サイトの「りんと小吉の物語一」でご覧下さい。前田慶次郎とその家臣角南小吉は秀吉の起こした文禄の役で上杉家と朝鮮に渡ります。そこには小吉を慕う茜丸も共にいます。また、前編で柳生の庄で自らの出自を知ったりんは、父である柳生石舟斎と別れ、上泉主水と奈良に行きます。主水はりんを興福寺に連れて行きます。そして阿修羅像と対面します・・・その夜、阿修羅像を盗もうとする僧兵達が現れる。

２００９年に東京で阿修羅像展が開かれ、それを記念して公開しました。天から降りてきた阿修羅とそれを地に留めた古武士、小吉の契りの物語。

一　小吉と茜、海を渡った地で（前書き）

拙著「前田慶次郎異聞」は私のサイトに図書館の蔵書情報があります。「泊瀬光延」で検索して下さい。

一　小吉と茜、海を渡った地で

文禄元年（１５９２）、冬、慶次郎と小吉主従は直江兼続と共に朝鮮に渡った。

兼続の主、上杉景勝は太閤秀吉の名代として熊州城に入りその修築に従事した。

朝鮮の南部とはいっても冬は厳しい寒さに晒された。冬の寒さには慣れて居るはずの上杉軍ではあったが、城壁用の石を運び上げる間、容赦なく吹き荒ぶ山の寒風に体力は奪われ、肺炎などをおこす将兵が続出した。

慶次郎と小吉は将兵の間を見回り、倒れそうな者を見つけるとオンドルのある小屋に連れて行き休ませた。せき込みながら温かい粥をうまそうに食べている兵を見ながら、慶次郎は小吉に言った。

「小吉。よくりんがやったあれをやるか？」

「へえ。でもこれだけの人数に食わせるには・・・じゃ、下の村で購って来ますか。」

小吉は砂金を持って平地の農家に行き、雄牛を一頭買ってきた。厨房の足軽共を集め、牛の四肢を縄で縛らせた。

何をやるのかと見守る足軽達の前で小吉は三尺の大刀を抜いた。右肩に刀を乗せ、沈み込んで左足を前に出す半身の構えをとり、上半身を右後ろに少し捻ると次の瞬間、構えを真っ向上段に取り直し、鬼のような形相で牛の首を両断した。

足軽達はあっけにとられ、首の無い牛が崩れ落ちると次の瞬間、わ～と叫び声を出した。

小吉はそのなかでも動じずに見ていた者達を選び出し、聞くとそ

の内の何人かは熊狩りをしたことがある山の者であった。
その者達に牛の解体を指図して大鍋に内蔵を細かく切り、葱(ねぎ)、生姜と味噌で煮込んだ。また、残りの肉は塩漬けか干肉にすることを命じた。

りんは時々、鴨川下流の隔離された集落に行って、死んだ牛や馬の始末をしている彼等からもつや肉をあがなってきた。それを味噌で煮込んで慶次郎達に喰わせた。

最初、慶次郎は猪の肉だろうと思ったが、味が違う。戦場で喰った死馬の肉とも違う。
「りん、この肉はなんだ?」
りんははっとした。平安時代の禁布以来、日本人は牛馬犬の肉を表立って食べなくなった。だが、全くではなく、猟師が捕る猪、鹿、山鳥などが珍重された。牛馬が死ぬと死体処理などを生業とする民に払い下げられた。彼らは皮革を生産するが、食肉の流通がないので一般人がその者等の所へ行って不浄の肉を買うのは憚った。

「あ・・も、申し訳ありません。お、俺、とんでもないことをしました!」

りんは刺客稼業をしていた時、賤民とされる人々の部落の近くに野営することがあった。身を隠すのに都合が良かった。そんなあるとき、部落のほうからよい匂いがした。宍蔵と佐助が行って貰ってきたのが牛の肉であった。彼等は腐る寸前の骨付き肉を、常に携帯していた塩を塗り焼いて食べた。彼等の育ち盛りの肉体は滋養のあるものを本能的に見分ける力があった。

りんは無意識に小吉等にうまいものを食わせようとこの料理を思いついたのだが、慶次郎ほどの名のある武士が不浄の肉を喰らった

などと噂が立ったら一大事である。りんは鍋を始末して小吉の仕置きを受けようと思った。

鍋を持とうとすると、慶次郎が箸でりんの手の甲をぽんと打った。

「りん、うまいぞ。持っていくな。」

慶次郎も体力を付けてくれる食物を見分けたのだ。

一の二

湯気が出る椀を持ってふうふう言いながら旨そうに喰っている雑兵を見ながら、上杉軍の侍大将、直江兼続は言った。

「慶次殿、これでは帰国した後、越後から牛がいなくなってしまうぞ。」

冗談であった。農耕用の牛を食用にするという常識はまだなく、そうしようとしても一般民がとても贖える代物ではない。

慶次郎は笑って、

「越後には鮭が登って来るではありませんか。焼いても良し、刺身なら尚旨し。」

鈴木牧之（１７７０～１８４２）著『北越雪譜』には越後の冬の幸の一つに鮭が紹介されている。

兼続は越後の春日山城に急使を出し、佐渡の金を大量に送らせた。牛を購うためである。

秀吉が海外派兵が出来たのはある意味では奇跡である。覇王とはいえ、各大名の経済の詳細まで把握してはいない。大きな金銀山は押さえてあったが、各大名自身がこのときの戦争経済を支えたと思われる。その一つが彼等が密かに開いた金山であろう。

遠征中に兼続が敷いた軍掟（ぐんおきて）は一般民の村からの略奪、暴行を厳しく禁じていた。必要なものは購わせた。

これは美談ではない。優れた指導者のみが出来る施策なのである。海を渡って来てまた帰らねばならない。それを可能にするために軍律を第一と考え、住民との軋轢を可能な限り押さえ、全軍の無事の

帰還を図ったのである。

この意味では秀吉軍は各武将の意志の統制が取れていなかった。一国を制するにはそこに居続けなければならない。即ち船を焼かねばならなかった筈だ。そうしていれば後日、大敗を喫することになる李舜臣の船団を陸から駆逐することが出来たかも知れない。

軍律がいくら厳しくても兵達は働き盛りの男達である。侵略地の住民にとって大人しかったとは思えない。

我が兼続や慶次郎が恥づべく行動をしていないことを願いつつ、話を進めよう。数年後に再発する慶長の役で、ある愚かな大名は、女子供を含めた民を殺し、削いだ耳鼻を、ただ秀吉の命を実行したとばかりに送った。『耳塚』の所以である。

兼続はこんな侵略は無意味であると考えていた。

狭い日本だけでもやることは山ほどある。いや、そのころの人口千二百万（と云われる）にはまだ広かったかも知れぬ。

結局、この侵略が成功し、言葉、風習の異なる人々がいる領土など貰ったところで、苦労するだけではないか。

仏教の一つでさえ苦労しているのだ。

一向一揆を押さえるのにいくさを何度したことか。だから早めに役目を果たし、帰国するのが第一だった。

徳川家康、前田利家も同じように考え、太閤を支える大名ということを良いことに動こうとは思っていないだろう。その反面、西国、特に九州の大名や秀吉旗下の武将は却って馬鹿を見たといって良いだろう。

加藤清正のように開き直って、北朝鮮まで攻め上って行くしかなかった。

一の三

城下にいつのまにか郭（くるわ）が出来た。

日本から一攫千金を狙って娼家も来た。故国に妻子を残して来た者共も、非番のときはこぞって繰り出して行った。男の性衝動は何時の世も避けがたい。兼続は大将なのでやせ我慢をしているようだった。気晴らしに寒中の連歌会をよく催した。

小吉は、慶次郎が兼続や親友の安田上総介能元の所へ行っているとき、あてがわれた小部屋でりんを思ってぼおっとしていた。

するととんとんと戸を叩く音がする。

オンドルの小部屋の戸を開けると、茜が端座していた。

「茜殿・・・」

あれ以来、小吉は茜を避けていた。

やはり噂がたったのだ。

自分は何を言われても良いが、茜は長男ではないが、れっきとした兼続の家臣の息子である。それに、もうりんを裏切ることは出来ない。不器用な男なので仕方がない。

茜に会うたびに目を逸らせそっけない仕草をするが、茜はじっと小吉を見る。

茜はもう隠さなかった。からかう者の前でさえ、私は小吉殿が好きです、と言い放った。されとて小吉にいちゃいちゃとするでなく、小吉の前で皆がさてどうするかと見守っていても、少しも臆さず小吉と話した。

普段と変わりない礼儀正しい態度であったが、目は恋した娘の様に小吉を見た。

若干、十六の茜はまだ男に変化していない美しい少年であった。

茜はこの時代に行われていた『兄弟の契り』を小吉に望んでいた。
小吉は茜の道標であり、憧れでもあった。『兄弟の契り』を結んだものは妻帯しても終生その交わりを持ったという。『信義』を根本とするので時には命をかけてそれを守った。

武士は家のために働く。
家の本質は『土地』と『年貢を収める支配民』のことだ。武士はその頂点にある集団のことだ。
家と家を繋ぐために男は嫁をめとる。だが、戦乱の中に命のやりとりをするとき、それでは不足だ。生き死にを超えて戦うともがらが必要だ。

現代でも幸運な読者は『親友』を持っているだろう。
真の親友ならば万一の場合、身の危険を省みず行動してくれまいか？今の時代は職業は多様化し、各人の生き様もさまざまだ。でも『家』『家』いうものを守ることに徹した武士の時代ならばどうだろう？

茜はいたずらっぽく笑うと、持っていた包みを見せた。
「これ、…今日、日本から届いた葛餅なのです。兼続様から頂きました。一人で食べるのが勿体なくて。」
茜は小吉が招き入れる前に部屋に入ってしまった。
小吉は仕方なく角の火鉢に掛かっている鉄瓶から茶を入れた。隣の部屋の連中は非番で郭に行っている。

小吉は茜の横顔を見ながら茶を出した。茜は小吉の斜めに正座して正面を向いている。
「小吉様、ありがとうございます。」
包みを開け、小吉の出した小皿に葛餅を分けた。その仕草は流麗で涼やかだ。

小吉は股間が疼くのを感じた。

すでに名護屋で茜を抱いてから三月は立っていた。

あの時の茜の肉体の中の感覚が小吉を苦しめた。

久しぶりに近くで茜の美しい横顔を見ると、むらむらと湿った欲望が小吉を苛んだ。長い睫、可愛らしい鼻と口、しっとりとした長い髪と前髪の耳もとに垂れるほつれ毛。白くきめの細かい肌。風呂に入ってきたのだろう、ほんわりとする匂い。

茜は小吉なら拒まないだろう。衆道を極めてしまった小吉には茜は女性(にょしょう)だった。

小吉は袴を握り締めて自分を制した。声を荒げた。

「…何故、来た？皆に見られれば親御の恥となるぞ」

誰の目にも小吉が茜を避けていることはわかった。小吉はりんという契った者がいるということも周知の事実だ。茜が横恋慕している、と噂されていた。

「構いません。好きな人は好きなのです。あの前田利家様でさえ、織田信長様に愛されたと聞きます」

「あ、あれは身分の高い方の話ではないか！貴方と兼続様となら皆、そう思うだろう。だが、儂は只のいくさ侍じゃ！貴方にとって何の得にもならぬ」

茜は不思議そうに小吉の目を見た。

「得？得とは何のことです？」

小吉は言葉に詰まった。

一の四

茜は葛餅の乗った小皿を小吉に捧げた。

「さあ、食べましょう！」

二人は言葉無く餅を食べ、茶をすすった。

小吉は茜を理解できなかったが、茜は始終微笑みを浮かべ楽しそうに見える。

「茜殿・・儂といて楽しいのか？」

茜は頬張ったまま、目を見開いて小吉を見て頷いた。小吉はりんの餅を頬張ってうれしそうにしている顔を思い出した。切なかった。

暫くして茜は言った。

「いくさにお供させて頂きたいと思います」

「いくさに…？」

「兼続様に御小姓役を御免させて頂き、騎馬隊の先鋒として働かせてもらうつもりです」

「ふむ。それは勇ましいことじゃ。貴方の甲冑姿はさぞや愛でたいと思いますぞ」

茜はうれしそうに笑った。そして目を落とし意を決して言った。

「小吉様。お願いがあります」

小吉はまた抱いてくれ、と言われるのかと思い身を固くした。

「剣と槍のご教授をお願い致します」

「わ、儂にか？」

「今までは、兼続様をお側でお守りするため、小太刀を研鑽して来ましたが、これからは徒（かち）、馬上で戦えるための修行をしたいと思い

ます。小吉様は宝蔵院流の槍の使い手でおいででしょう」

小吉は笑って、

「儂などで良ければいくらでもお教えしよう。だが、御家中に槍の名手はたくさんいる」

この頃、武将で強者と言われる者達はすべからく槍、長巻きの名手と言ってよい。

茜は顔を少し傾(かし)げて、

「…私の気持ちはおわかりだと思います。他の方に教えて頂くつもりは殊更ありません。小吉様に教えて頂けないなら一人で修行します」

そして、小吉に付いていくさに出るつもりなのだ。足手まといになるならそこで死ぬ。小吉は茜の心が珍しく分かった。りんも慶次郎と対決し敗れ、小吉に救ってもらったとき、同じ事を言ったのだ。

「・・・お教えしよう」

小吉もむげに茜に冷たく振る舞うのを苦痛に感じていた。自分を慕っているのだからなおさらである。

彼は不器用だが、却って人の心の痛みが気になった。戦場で薙ぎ倒す敵ならばなんの省みることもないが、朋輩となると話は別だ。だから、師として槍を教えるというのは、自分の心に余裕を与えることが出来る。今のままではりんへの想いと板挟みになるだけだ。

翌日から小吉は茜に槍の指南を始めた。

山城の隅に大きな稽古場を兼続は作っていた。一日の役目が終わると二人はそこに行き、小吉はまず六尺棒の組太刀の形を教えていった。

棒、槍の用法はその長さ故、制限が多い。まず実践的な身の守り方を教えたかった。小吉の打込みの速さは実戦に近かった。人に教えたことなどそれまで無かったのだが、決死の場合の感覚を必死に茜に伝えようとした。実戦における恐怖と、それに打ち勝つ技を教えなくてはならぬと思った。

最初、周りの者は逢い引きをするために子弟関係を結んだのだろうなどと色眼鏡で眺めていたが、彼等の稽古を見た者はその凄まじさに何も言わなくなった。

茜の尋常ではない運動神経は小吉の教えに良く応えた。それでも茜の体はあちこち打たれ、兼続の見回りの共をしている時に腕に包帯を巻いていることも、びっこを引いていることも珍しくなかった。

小吉が役目で、茜が非番のときは一人でもくもくと棒を振るっていた。

二　りんと主水、奈良で阿修羅像と逢う

さて、りんはあれからどうしただろう。

話はその年（文禄元年）の夏に遡る。

りんは柳生谷から京都に帰る途中、主水と古都奈良に遊んだ。

主水はりんに見せたい物があると興福寺に向かった。

奈良の興福寺は藤原不比等が大和国高市郡厩坂寺を平城京に移したもので南都六宗の一つ、法相宗大本山である。宮廷を支配していた藤原氏の氏神を奉る春日大社を習合し、鎌倉時代より広大な所領と僧兵を擁し、大和守護職として奈良一国の支配権を持っていた。だが、度重なる戦乱と侵略に疲弊し、信長、秀吉による寺領の没収を受け、単なる学僧の大学という地位に落ちていた。

前年の秀吉の子、お拾いの病気の時、祈祷の労を認められ、没収された所領を多少回復した直後であった。しかし、まだ散らばった僧、お寺衆が戻らず往時の賑わいはない。他宗の学僧を受け入れ、境内のみが自治領であった。

これまで、五重塔以下、境内の堂塔は焼失と再建を繰り返していたが、文禄元年の今、五重塔は応永二十八年（１４２１）に再建され、その周りの堂塔も昔の姿を取り戻していた。

りん達が壮大な南大門（現代では焼失。跡のみ残る）を入ると右手に五重塔、正面の中門の向こうに修築中の中金堂（同じく現代では焼失、再建中）が見えた。

主水は南大門を抜けるとすぐ左に曲がった。すると前方に、八角円堂と呼ばれるが常に三面しか見えぬ南円堂が見えた。彼等はその

右方の長方形の建物に向かった。

東西に配された二つの金堂の一つ、西金堂（さいこんどう）である。

主水は途中で、向こうから歩いて来た僧を呼び止めた。礼をすると、

「某は上泉主水と申す。西金堂別当の円戴殿にお会いしたい」

僧は一礼して、

「畏まりました。円戴師は本坊に居ります。ご案内致します」

「いやいや、お手紙を差しあげておりますが、西金堂の緒仏像を拝ませて頂きたいだけなので、その前でお許しをお待ちいたすが」

僧が本坊の方へ行って暫くすると、共の僧に日傘を差させて柿色の袈裟を着た僧がやって来た。西金堂の日陰の中の主水を見ると目を細めて、

「これはこれは上泉様。お久しぶりで御座います。お手紙を頂いてからいつ来られるかと待ち詫びておりました」

りんが礼をするとじっと見て、

「ほう。これが例のお方で？」

「丁度、柳生の庄へ行って、この者を連れて来ることが出来た。儂の友、角南りんで御座る」

りんはちょっと顔を赤くして、主水と円戴の顔を見た。

主水は自分のことを『友』と言った。自分への恋慕は諦めたのだろうか？

二の二

主水はりんのことを円戴になにやら話しているようだが、何を話したか皆目見当が付かぬ。

円戴はお供の僧に言いつけて外開きの三つの大扉のうち、左の戸を開けさせた。開けるとさらに格子戸がありそれを横に開けた。石段を登り高い敷居を跨いで中に入ると、木精と埃の匂いが強くした。南北に長い堂の中央より西側に須弥壇がありその上に何体もの仏像の姿があった。

円戴がお供に三面の戸を次々と開けさせると薄暗い中に光が差し、像の一つ一つがよく見えるようになった。

左に法体の仏像が十あまり。右に八体の異形の戦袍を着た像があった。中央に、獅子の台座に向かい合う二頭の竜がお互いの腹を中空にして金鼓（こんく）を抱いている。仏像は釈迦の十大弟子像、異形の像は釈迦を守る八部衆である。

本来ならば真ん中に如来の本尊があり、左右に月光、日光などの菩薩像があるはずだが、それらは焼失してしまった。

十数体の像は堂の奥に余裕をもって並べられていた。

円戴は主水達にまず十大弟子像の名前を挙げていった。舎利弗（しゃりほつ）、須菩提（すぼだい）・・など、難しい漢字の名前の彼らは、りんにとって本当に偉い人達のように思われた。

円戴は次ぎに右の像の方へ進んだ。

「ここへおわすはもともと異教の神々なのです」
りんはおずおずと聞いた。
「ではお釈迦様のお弟子ではないのですか？」
「彼等はお釈迦様に逆らい、悟りを邪魔しようと悪事を企んだ者達なのです」

りんは驚いた。
「で、では何故、このような像となり、ここにお弟子達と居るのですか？」

円戴は頬笑んでりんに言った。
「お釈迦様の説法を聞き、改心し、仏法に帰依したので御座います」

りんは、はあと意外な顔をした。悪神というなら人々を苦しめ、また殺し傷つけた者達ではないのか。そんな者達が改心しただけで今度は良き神としてあがめられるとは。

りんは円戴に促され、端の像から一つ一つ眺めて行った。まず像の全体を見て顔を覗き込んだ。
「その初めの像は畢婆迦羅（ひばから）と呼ばれる神です。」

その男の像は耳から顎に髭を生やし宝髻（ほうけい）と呼ばれる髪の毛を頭上で束ねた髪形をしていた。中国風の胴着を長袖の上に付けている。
「あはっ、小吉に似ている！」

次の乾漆像は鳥の頭を持っていた。迦楼羅（かるら）、と円戴は呼んだ。気味悪そうにりんはその顔を眺めつつ足を運んだ。そして次の像の前に目を移したとき、
「・・？」

りんは不思議な像を見た。

それは他の八部衆の像とは全く異なった趣の姿をしていた。

始めに八部衆を一舐めしたとき、一体のみ違う姿のものがあると感じてはいた。

その像だけは戦闘服ではなく、半裸の体に左肩から薄い布（きれ）を斜めに掛け、下は裳と呼ばれる腰布を巻いていた。

頭髪は宝髻で顔は美しい少年のものであった。だが、異なるは左右に顔があり、肩からはそれぞれ三本の腕が伸びていた。

三面六臂の像である。

前の一対は手を合わせ、横に伸びた上の一対は高く手のひらを上に向け、また下の一対は肘を曲げ手を掲げていた。

それぞれ何かを持っていたと思われるが今は欠け落ちていた。

二の三

りんは正面の顔に見入った。

真摯に何かを凝視するその目の眉は怒りに満ちていた。

りんは左の顔を見た。

なにやら唇を噛んで黙考しているようだった。

右の顔を背伸びして見た。正面の顔よりも和んでいるようだがやはり眉間が立っている。何を見て、何を想っているのだろうか？

円戴は、像に見入っているりんをまじまじと見ていた。主水の顔をちらと見た。

主水は小さく頷いた。

円戴はこの像に比するような人間がいるとは今まで思わなかった。確かに美しく似ている少年あるいは少女はいた。

だが、この少年は主水の話に因れば美しいだけでなく、正に悪鬼の過去を持っているのだ。

「・・りん様。それは阿修羅王で御座います」

りんはえっと驚いた。

りんは、阿修羅王とはインドの悪神で、忿怒の顔を持ち、悪行の限りを尽くした神であると聞かされていた。小吉と京都の三十三間堂に行ったとき恐ろしい顔の阿修羅王像を見た。

前の年、最上義光とのいくさで阿修羅と呼ばれたときそんなに恐ろしい顔で戦っていたのかと思っていた。
だが、この西金堂の阿修羅はまるで違う。
りん以外の者達はこの興福寺の阿修羅を知っていたのだ。小吉も知っていたのだが、教える機会は無かった。

「あなた様も、阿修羅と呼ばれるお方と上泉様にお聞きしました」
りんは吃驚して叫んだ。

「と、とんでもありません！あれはいくさで俺がそのように見えたというだけです。阿修羅とは修羅道に住む残虐な鬼だと聞いておりました。俺もおぞましい姿でそう呼ばれたのだと思います」

「・・阿修羅の鬼の長（ちょう）である阿修羅王は一方の神、帝釈天と凄絶な戦いをした悪の神でした。お釈迦様が現れる前はインドラの国々を支配する神の一つでした」

りんは唇を少し舐め、小さく頷きながら円戴の言葉を追った。

「お釈迦様が仏教を広め、同じ土着の神であった帝釈天は仏教に帰依いたしました。でも阿修羅王は仏法を憎み、教えに従う人々を苦しませたのです。そして長い間、帝釈天と戦い続けました」

円戴は少し言葉を切ってまた続けた。

「ある日、この阿修羅王は仲間の悪神達と、お釈迦様の御説法を邪魔しにやって来たと言います」
りんは、円戴の顔を不思議そうに見ながら聞いていた。

「しかし、御説法を聞いている内にその教理に引きこまれて行きま

した。そして悪神共が騒ぎ出してもそれを窘(たしな)めてお話に聞き入ったと云います。その胸のうちは過去の悪行を思い出し、それを悔いる気持ちで一杯になりました。そして仏法を守ることを決心したのです。・・その心の様子をこの像の三つの顔で表しているのです。丁度貴方の今のお顔のように」

りんの顔は、円戴の話を聞きながら正にこの阿修羅像の表情になっていた。

そして口を少し開けると、その目から涙が一筋流れ出た。

「わ、・・私の悪行も赦されるのでしょうか・・？」

涙を指で払った。

「お釈迦様の前に罪を悔いれば、全ての罪は赦されます」

後藤権左は、異国の神に仕える伴天連に卑しい人など居ないと言われたと言った。宗教とはなんと寛大なものであるのか。

「・・それを聞いて安心しました。でもやはり俺は地獄に堕ちると思います。俺には剣を振るうしか能がありません。そうしなければ好きな人とも一緒に居ることが出来ないからです。でも、それで俺は満足です」

円戴は答えた。

「私も阿修羅がそう簡単に変わったとも思っていません。彼は八部衆として、やはり戦いをもって仏を守ることを選んだのです。だが、彼こそ真摯で疑いのない心を持っており、仏敵にとっては情け容赦の無い、恐ろしい敵に違いありません・・・」

円戴はりんの目を見ながら言った。

「だから、彼の姿は他の八部衆とは異なっているのです。敵も味方も彼の美しく凄まじい姿にただ恐怖するのです」

暫く黙って、

「このお姿は真摯にこの世の生を生きる人を映しているのです」

三　阿修羅像を奪う者（前書き）

さてここから飛んでもない設定になっていると思われる読者もおられると思います。でも興福寺にメールしてこんなのどうでしょうか？と聞いたら、その対応して頂いた方は「荒唐無稽かも知れないが面白いのではないでしょうか」との事。合掌。

三　阿修羅像を奪う者

主水とりんはその夜、西金堂の隣の小子房という長屋の宿舎に泊まった。

学僧が泊まる所であったが、武士の身分の者にも許された。隣り合った別々の小部屋をあてがわれた。

深夜、ふと人の気配で目を覚ますと表が騒がしい。主水様、と声を出し剣を取って寝間着の儘、外に出た。

すると西金堂の縁に火が見える。まだ小さいが火事のようだ。

僧達が長刀（なぎなた）や棒を持って走って行った。

主水が駆け来る僧兵に叫んだ。

「何事じゃ！」

「蓮華王院の者達が仏像を狙って来たので御座います！」

蓮華王院とは京七条大和大路にある三十三間堂を擁する天台宗の寺である。後白河法皇の発願により平清盛が造進した。

西金堂の前に行くと、金堂の石縁の上に壊された戸や板塀が積み重ねられ薪の様に燃えていた。その火に照らされて、黒い帷子に胴着小具足を着け、頭に灰色の布を巻いた者達が、大槌をもって中央の扉の鍵を打ち壊そうとしていた。

その石縁の前に数十人の鉄枠の付いた六尺棒を持ち、大刀を佩いた僧兵様の者達が仁王立ちに立っていた。駆け付けた興福寺の僧兵が、木槍や棒を構えて睨み合っていた。

主水が駆け付けて、武装した僧達に呼ばわった。

「これは何の真似ぞ！」
中央の体の大きい僧兵が大声を出した。
「この寺は既に朽ちかけている。御仏像をそれに相応しい場所にお移し申し上げる！」

興福寺は過去、平氏の乱があるごとに火を射掛けられて来た。そして京都の蓮華王院は平氏の寺なのである。
三十三間堂の仏像も同じく度々の被災に合い、過去に興福寺の別当がその修復に尽力したこともある。だが、僧兵達はお互いの支配を嫌い、事あるごとに争ってきた。
特にこのときの蓮華王院は秀吉から篤く保護され、興福寺の凋落と対局にあった。

千体と云われる千手観音は別格として、観音二十八部衆等の仏像は興福寺のそれらと対比出来る。
古今の間、藤原氏の権力を背景としてきた興福寺に及ぶのは相国寺、一向宗の石山本願寺ぐらいであった。
だが、戦乱に疲弊し、僧兵も居なくなった今、蓮華王院の血気盛んな上級僧等は興福寺の宝物に目を付けていた。

三の二

円戴が薙刀に胴巻きを着けて駆け付けてきた。

「おのれ、明院！胤栄様が留守を狙いおって！阿修羅像は渡さぬぞ！」

「円戴！この腐った寺にいると息苦しいとあの阿修羅殿は儂の夢枕に立った。これ以上は待てぬと仰せじゃ！」

胤栄は興福寺の塔頭、宝蔵院の別当だ。新陰流の柳生石舟斎と昵懇の仲で、その槍術を大成し、その名は天下に轟いていた。しかし旅に出てしまった。何を悟ったか、この後胤栄は道場をたたみ、暫しの間、宝蔵院流槍の響きは止むこととなる。弟子の僧達も各地に散らばっていた。

槍の名手、小吉はここで修行した僧に槍を習った。

興福寺側の僧達が木槍で僧兵に撃ちかかった。既に往年の興福寺の僧兵の面影は無かった。

蓮華王院の僧達は、慣れた風に六尺棒を繰り出し円戴の僧達を圧倒していた。

主水とりんは顔を見合わせたが、主水は言った。

「りん、剣を抜いてはならぬ。ここは法域じゃ！」

りんは頷いて小競り合いに目を戻した。

自社の法域を血で汚せぬことを逆手にとった蓮華王院側の小賢い戦法である。

主水は、近くの僧が持っていた六尺棒を取り上げ、自分の大刀を預けた。そして唸り声を上げて、中央の指導者らしき大男を目指し

て駆けて行った。

遂に金堂の中央の大扉の錠が大槌で打ち壊された。

大扉が開け放たれ、格子が打ち破られた。石縁の炎が中を照らした。

像を運び出す役目の五人の僧兵が土足で阿修羅像の前に立った。上の者が手短に指図し二人づつ壇上に上がり阿修羅像の脇に付いた。

正面に残った上役が声を出そうとしたとき、高く若い声がした。

「待て！」

りんが小競り合いをかいくぐり、破られた戸から彼等の後ろに近づいて来た。

大刀は履いておらず、その代わりにその両手に、一尺五寸ほどの朱色の丸い柘植の棒を持っていた。棒の端には紐を通してあり、自らの手首に巻かれていた。

これは馬などを制すときに使われた『鼻捻り（はなねじ）』と言う道具だった。後に警棒のような用途で使われるようになり、武器として流儀も生まれ、江戸時代の捕縛道具として残っている。りんは宿舎の壁に掛けてあった鼻捻りを取ってきたのだ。

六尺棒や剣に対しては、有効な武器とは思えぬが。

上役の男は振り向いてりんを見たが、後ろの炎のせいでりんの顔は陰っていた。

「誰だ、お前は。学僧ではないようだが」

「俺は今夜、ここで一宿の恩義を受けたものだ。御坊様がなぜ争って仏像を取り合うのだ！」

僧兵はくっくと笑うと、

「小僧。お前の知ったことか。この寺はもう役目を終えたのじゃ！そして碧眼の阿修羅は蓮華王院に相応しいのじゃ！邪魔をすると痛い目に会わせるぞ！」

「やめて下さい！やめなくば、お止め申します」

三の三

りんは棒を両脇に下げてその僧に近づいた。

その僧は漆塗りの籠手を上膊（ふとうで）と下膊（肘から手首の部分）に着けていた。りんの棒をその籠手で受けるつもりだ。腰を落とし、両拳を中段に構えてりんに向かった。

りんが一間（約二メートル）の間を越えた。しかし棒は下げたままだ。

僧は同じ構えで踏み出した。お互いの顔が半間に迫った。

僧はりんが仕掛けて来るだろうと思っていたが、来ないのでりんの顔に向けて右拳を繰り出した。空手の中段正拳に近い。拳がりんの顔に当たる寸前、りんは僧の右腕を左手の棒で左に巻いた。

その瞬間右上に飛び上がり、円を描いてふりあげた右手の棒を僧の左首筋に撃ち込んだ。

「ぐおう！」

僧は泡を吹いて横に倒れた。

「貴様！」

阿修羅像の脇に侍していた者共は驚いてりんに掴みかかって来た。阿修羅を運ぶために脇差ししか佩いていない。だが、数を頼んだ彼等の手をりんは右に左にかわし、痛烈な一撃を彼等の頭や手首に与えていった。

りんが阿修羅の像の前に振り返った時、堂の外から来る炎の明かりがりんの姿を照らし出した。

痛みに喘ぐ僧達の目に生き身の阿修羅が映った。

壇上の阿修羅像はその丈、五尺（実寸百五十三センチ）、その前の壇の下に立つ五尺五寸のりんは全く同じ背に見えた。

像より細面だがその眉の怒り、その射るような眼差しは阿修羅像が生身の者として蘇ったと思われた。その上、りんは寝る前に髪を頭の上で束ねていた。阿修羅を見て真似してみたのだ。誰に見せるつもりもなかったが。

大立ち回りをした結果、束ねた髪は広がり、丁度、阿修羅の宝髻のようになっていた。

りんが棒を逆八の字に構える背後に大きな六臂の影が映った。

西金堂の中は全くの闇である。扉の燃える火が揺れる。りんの白い肌と唇が赤く映え、揺るぎない姿勢と妖艶な姿態が恐怖を呼んだ。

「あ、阿修羅像が・・・！」

「阿修羅像が生き返った！」

痛みを忘れて盗僧達は這い、または尻で後退りをしながら戸の方へ逃げた。

泡食って、敗れ戸から逃げ出(いで)て来る配下を見て明院は驚いた。

「何をして居る！」

三の四

だが、彼等の後から出てきた者を見てまた驚いた。

正に阿修羅の如き者が、棒を逆八の字に構えて出てきたではないか。

揺らめく火の映りに背後に数本の腕の影が見えたように思えた。

「だ、誰だ！お前は！」

主水が後ろで打ち倒した一人の敵僧の首に長棒を押し付けながら、にやりと笑いながら低い大声で言った。

「それは阿修羅じゃ！」

それを見ていた双方の僧達がどよめいた。

明院は持ち場を代わりの者に譲り、りんに向かった。

六尺豊かな身長の上に二寸の高下駄を履いているので仁王の様に見える。中央の石段を軽々と二歩で登り、りんを見据えた。りんは上を見上げて睨んだ。

明院は驚いていた。阿修羅像に姿を写した少年は正にこのような者なのであろう。遠い西域から来た少女の様な者。汚れのない瞳に罪を赦さぬ怒り眉。形の良い薄い唇に中性的な肩と腕（かいな）。あの阿修羅像が造られた当初は琥珀の目に金髪の髪を持っていたという。

「・・お前は、この世の者か？」

仁王が聞いた。

この仁王の目は、生き身の阿修羅との邂逅を喜んでいるようだった。

「俺は上杉家客将、前田慶次様の家中の者だ。このお寺には縁あって仏像をお守りいたす。仏像を奪うなんてあまりにも酷い。どうかお引き下さい！」

「名は何と申す？」
「りん！」
仁王は左足を前に出すと、右手に持っていた六尺棒の下を左手で握り、りんの左足目掛けて撃ち込んだ。りんはとっさに背を反って後ろに宙返りをして着地した。
明院はりんの体勢を整わせる時間を与えず、棒で鳩尾を突いた。りんはそれを逃れて同時に後ろに跳んでいた。だが跳躍が低すぎ、背中から倒れてしまった。
明院がりんの胸を棒の鐺（こじり）で突こうとした時、主水の投げた棒が飛んできた。
明院は足を止めてその棒を避けた。
棒は金堂の戸に当たり跳ね返った。りんは左手の鼻捻りを明院に投げ、身を翻して主水の投げた棒を拾った。

足を半開きにして右肩を引き、肩の幅に棒を持ち自然に下に下げた。
明院は、この夜の襲撃の期を失したことを知った。
石縁の下では主水の棒に十人ほどが打ちのめされていた。これに釣られ、興福寺の僧達は士気が上がっている。
さらにこの『阿修羅』はただ者ではない。
これまで明院の連鎖攻撃をかわしたものは居らぬ。彼が棒を避けるために足を止めた一瞬のすきに体勢を整えた。さらにこの者に気を置く加勢の者がいる。宝蔵院の留守居の僧等も駆けつけて来る頃だ。戦って長引けばさらに不利となる。
「引けい！」
明院の判断は速かった。
乱入者達はささと円陣を組んだ。肩を支えられた者達が南円堂の参詣道の方に引いてゆく。このような場合の段取りは出来ていた。
戦える者は円陣を保ち、後ろにじりじりと退いて行った。それを興福寺の僧達が棒を構えて追って行った。

明院は円陣の前に立ち威嚇した。
「円戴よ！今日は引く。とんだ助っ人に助けられたな！」
りんをぎぬろと見て、
「りんとやら！前田慶次の家中と言ったな！気に入ったぞ。儂のもとに来い！悪いようにはせぬぞ！」
「俺はどこにも行かぬ！」
「ふふふ・・・また会おう！」
明院はひらりと巨体を翻すと暗闇の中に去っていった。
了

三の四（後書き）

前田慶次郎異聞後編その１はここまでです！続編をお楽しみに！
他に発表しているシリーズ「りんと小吉の物語～前田慶次郎異聞より」は小吉に逢って直後の物語です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3116f/

前田慶次郎異聞後編

2010年10月9日11時10分発行